

第8回エル・チャレンジセミナー

～楽しくはたらき、楽しく生きる～ 開催される

去る7月4日(月)アネックスパル法円坂において、
標題のセミナーが開催されました。

今回は基調講演と分科会1・2そして最終のまとめ、
という流れですすめています。

基調講演では東北大学名誉教授 菊地武剋(きくち
たけかつ)氏から大会サブタイトルと同じ「楽しくはた
らき、楽しく生きる」のテーマでお話されています。

“ひとは生涯にわたって発達する”という生涯発達の
心理学の概念にはじまり、その発達の段階ごとで役割が
あり、それは家庭の中であつたり、仕事や職業を通じて
も生じる。そして人は職業によってのみ生きるのではな
いという視点に立つと、職業経歴・職業生活といった
いわゆる「職業キャリア」という観点から、生涯を通して、
ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続、
という「ライフキャリア」の観点が重視されるようになって
いる。例えば、ある時期は子供・学生として、また
ある時期は職業人としての役割があり、その他にも家庭
人や余暇人などなど、その比重はそれぞれその時により
かわるものである。その過程のなかでの「はたらくこと」
ということに焦点を当てる視点が大事である。

具体的にはまず、何のために私達ははたらいているの
か?という勤労観・職業観をきちんともつための教育が
大事である。菊地先生がオープンカレッジで提示した資
料からみていくと、「お金をもらう(経済的意味)」「働く
ことを通しているんな人と結びつく(社会的意味)」「自
分らしく、自分にできること(心理的意味)」という大き
な意味があることなので、働けることは素晴らしいこと
という価値をもつことが前提となってくる。

次いで、仕事を続けていくことを考えた場合には、大
きく5つの段階がありそれぞれの段階に合わせて必要な
基盤となる能力や態度を育てることが必要である。挙げ
ておくと、1.未就労段階(仕事していない)2.就労準
備段階(働く準備や練習をする)3.就労移行段階(働き
始める、就職)4.定着段階(働き続ける)5.自立段
階(一人前になる)です。

こうした段階で必要となるのは、本人にとって仕事が
できることはいい事であり、また仕事をするうえで嬉し
いことと大変なことをきちんとイメージできることが
大事である。

そして、本人を中心として、職場や家庭とお互いに〈支
えあう〉関係が大事である。すなわち、職場においては
教えてくれる人・助けてくれる人がいて、その協力の中

で成果を出していき、「信頼される」「任される」といっ
た頼りにされる存在として相互が〈支えあう〉関係にな
ること。同様に家庭においても、本人が働くなかで励ま
されたりしながら、結果的に家族の喜びとなり、家族を
支えている自分という、お互いが〈支えあう〉関係にな
ることが、「はたらくこと」に大きな意味をもつことにつ
ながるとして重視しています。

続いて2つの分科会が実施されました。分科会1では
「働き続けるための契約制度」をエル・チャレンジ富田
理事長が、分科会2では、「働き続けるためのサポート体
制」というテーマを菊池先生がコーディネーターですす
めています。分科会終了後、総まとめを富田理事長が中
心となっておこなわれました。

そこでのおおまかな内容を主にまとめを参考にして
挙げておくと、分科会1「働き続けるための契約制度」
に関するところでは、

「施設なき授産」を掲げ、行政の福祉化の流れに対応
し、総合評価による入札(例えば障害者の訓練実施と成
果が入札時の評価に含まれる)により受注した現場を活
用しながら今日までの形を築き上げてきた。(時代を)一
周先回りしてきた面もあるので、これから各地域へも輪
を広げていきたい。とにかくソーシャルファームという
視点に立ち、はたらく場や社会参加する場を創らなくて
はならないし、その仕掛けとなるものが必要なのである。

分科会2「働き続けるためのサポート体制」について
は、先に述べた基調講演からの関連で触れておくと、は
たらくことを継続するためには、本人を中心として、雇
用する企業や現場責任者、支援機関、主に家庭など生活
拠点とがきちんと連携をもち、基本的な方向性について
相互に認識できていることが重要である。

両分科会を通じて、これからの道筋を示していくと、
「働きたい」という人間の根源的な欲求に応えるため
には、「就労支援の社会化」が必要ではないか。すなわちそ
れは、労働市場の外側でなく内側でおこなわなければな
らない。労働市場の中に多くの就労支援をデザインする
こと、それが「施設なき授産」の意味するものである。
そして総合評価入札(評価の対象として雇用を競う)
という競争にきちんとした目的とルールを定めれば、そ
こからも雇用を創出できるはずである。

もうひとつのキーワードとして福祉を興すための“新
雇用産業”という発想です。福祉という公益性の高い産
業を興すことが、仕事を興すことにもなるという提案で
す。障害者雇用の形が「福祉」と「雇用」と「産業」と
をうまく結実したものになることを願わずにはいられま
せん。